

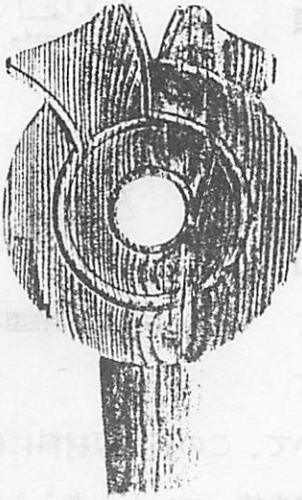
乙貞

第94号 通巻17巻第3号
1997年9月30日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎0775-85-4397

☎524-02
守山市服部町2250番地

下長遺跡でさしば状木製品出土



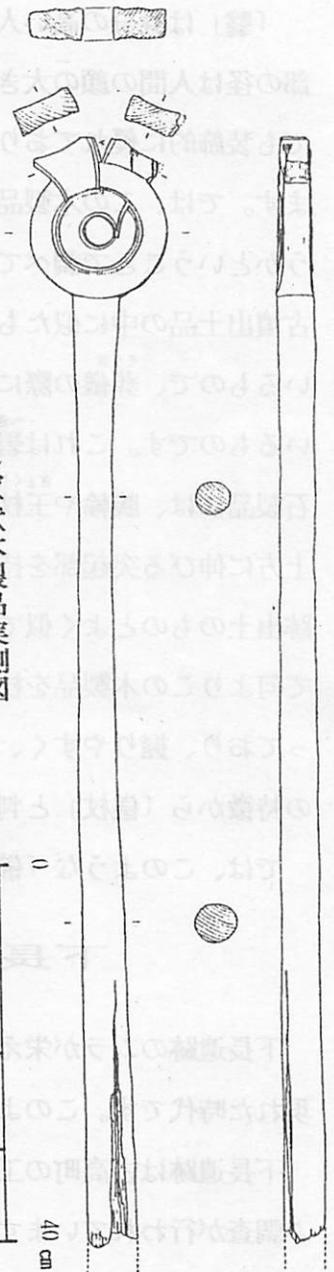
部分写真

古高町の下長遺跡第1調査地点から「さしば状木製品」が出土しました。古墳時代前期に埋まり始めた旧河道から、多数の木器にまじって見かりました。

「^{さしば}翳」とは^{うちわ}団扇に^え長い柄がついたような形状をしていて、高貴な身分の人が儀式のときに^{じゅうしや}従者によって顔に^{かざ}翳した道具です。今回出土した木製品を「^{さしばじょうもくせいひん}翳状木製品」という名前で呼んでいます。おそらくこの集落にいた権力者が儀式のときに用いた「^{つえ}杖」ではないかと考えられます。

残存長は約117 cmで、おそらく2 m近くの長さがあったものと考えられ、スギで作られており、時期は古墳時代前期です。あいにく柄の先が欠けていますが残りは良く、写真のとおり頭の部分は円盤状で中央に丸い孔があり、円盤からは一対の突起が外反しながら伸びています。そして「^{そたいもん}組帯文」と呼ばれる文様がレリーフされています。組帯文とは古墳の出土品の一部に施されている「^{ちよっこもん}直弧文」という^{けんい}権威を象徴する^{しょうちやう}デザインの一つで、この文様自体も権威の象徴になります。

これまで下長遺跡では、権力者の住まいした建物や彼らの持ち物である^{つかがしら}刀の柄頭や^{いしくしろ}装飾品である石釧も出土していますが、当時この地にいた権力者がどのような人であったのか、大変興味もたれます。



さしば状木製品実測図

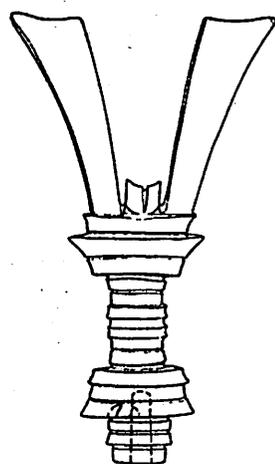


「乙貞」は服部遺跡の調査で出土した銅印に刻まれていた文字で、奈良時代末頃のものと思われる。大きさは約3.3cm × 3.3cm，高さ約4.2cm，重さ約75gです。この銅印は^{こう}公印として使用されたものではなく、個人印として使用されたものと考えられます。

「翳」ではなく「儀杖」では

今回、下長遺跡より出土した木製品を「儀式のときに用いた杖」（儀杖）と考えました。では何故、従来考古学で考えられる「翳」ではなく、「杖」としたのでしょうか。その理由を説明したいと思います。

「翳」は身分の高い人の顔を隠す道具です。今回発見された木製品の頭部の径は人間の顔の大きさより小さく、隠すことが出来ません。また、とても装飾的に優れており、感覚的ですが、どうも翳ではないような気がします。では、この木製品の頭部と似ているものは古墳時代には無いのだろうかということ調べてみました。すると、滋賀県ようかいち八日市市にあるゆきのやま雪野山古墳出土品の中に似たものがありました。それは琴柱形石製品とよばれているもので、葬儀の際に死者の頭部に置かれた祭具であったと考えられているものです。これは碧玉という石で作られており、古墳時代前期において、この石を原材料に使った石製品には、腕輪や玉杖などがあり、宝器的な性格を帯び、呪術的な意味を持っていたと考えられます。上方に伸びる突起部を持つ琴柱形石製品や玉杖などは、この形自体が権威の象徴として存在し、下長遺跡出土のものによく似ています。また彫り込まれている文様自体も権威を象徴するデザインです。そして何よりこの木製品を杖として手に持った時の感じですが、それは杖の頭より下の部分の柄が少し細くなっており、握りやすく、そこを握ると杖の頭の部分が持った人の顔の高さより少し高い所にくるなどの特徴から「儀杖」と判断しています。



雪野山古墳出土琴柱形石製品

では、このような「儀杖」を持つ人がいた下長遺跡とは一体どのような遺跡なのでしょう。

下長遺跡とは — 最近の調査とあわせて —

下長遺跡のムラが栄えた古墳時代は、社会において様々な身分の差が明確になり、有力者、権力者が現れた時代です。このような時代のなかで、下長遺跡はどのような姿をしていたのでしょうか。

下長遺跡は古高町の工業団地とその周辺に広がる遺跡で、昭和58年（1983）から現在までに18次に及ぶ調査が行われています。これまでの調査により、南北800m、東西200m以上の大規模な集落遺跡で、この範囲の中からは縄文時代中期から鎌倉時代にかけてのムラや水田が、また南から北へ流れる大きな川跡（旧河道と呼びます）が見つかっています。弥生時代までのムラはそれほど大きくなかったのですが、弥生時代末から古墳時代の前期にかけて旧河道の両岸の微高地で営まれたムラは大きく成長します。そして、旧河道はムラの生活で不用になったたくさんの土器や木製品などが棄てられ埋まり始めます。この廃棄された土器、木製品などは私たちに様々な昔の姿を見せてくれます。古墳時代初期の土器の中に

は東海、北陸、山陰、瀬戸内地方などの土器が混じっており、活発な交流があったことを語っています。木製品では、農業や土木工事に使われたであろう鋤、鋤、斧柄、日常用品である容器類、そして、当時の人が住んでいた家の一部である建築部材などが多数出土しています。これらから古代の木工技術を知ることができ、ムラでの日常生活の姿を復元することが可能です。特殊なものでは、権力者の腕を飾る石釧や、銅鏡、権威のあかしである「直弧文」と呼ばれる文様を彫り込んだ刀の把頭、琴や、当時の権力者の姿を垣間見ることができます。

その後、古墳時代の前期を過ぎた頃からムラは衰退し始め、それと同じくしてムラの中を流れる旧河道は徐々に埋没し、その埋没した部分を水田として有効に活用するようになります。

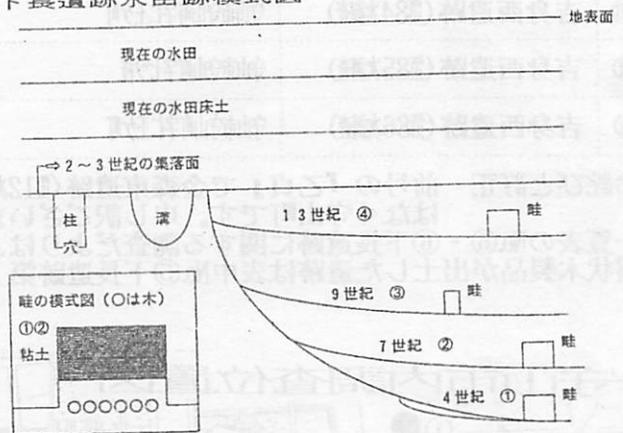
第17次調査は今月をもって終了し、「儀杖」（さしば状木製品）や多量の土器や木製品が出土し、今までの調査成果を裏付けています。

第18次調査も今月をもって終了しました。旧河道は幅約40m、深さ2mの規模を持っており、弥生時代の終わり頃までは水が流れていたようです。しかし、古墳時代前期になり、ムラの規模が拡大するとともに、土器や木器を廃棄するようになり埋まり始め、その後、この地形を利用して水田が営まれるようになります。一番古いものから古墳時代前期、奈良時代、平安時代、鎌倉時代の4面の水田跡が見つかりました。下層2面の水田の畦は木の枝を置いた上に粘土を盛り上げて造られています。そして、旧河道の落ち際に沿って古墳時代前期にムラを壊して溝が掘られていました。これは旧河道上の水田への灌漑用の水路であったと考えられ、ムラの衰退と共に水田が造られたことがわかります。他には独立棟持柱をもった大型建物などが4棟まとまって見つかります。以前の調査では見つかっていないことから、ここがムラの祭祀場であった可能性があります。また同様に大型建物が見つまっている近隣の伊勢遺跡や栗東町下鈎遺跡が衰退しはじめた頃に出現しており、前述の集落とつながりがあると考えられます。

以上のことから、下長遺跡は「儀杖」や大型建物などの存在と豪族の居館跡があり、古墳というお墓からだけでなく、集落遺跡からも権力者の存在が想定できます。又多量の土器や木器などから当時の地域間交流の姿や日常生活の一端が窺え、居住域であるムラと生産域である水田との密接な関連性により、当時のムラの風景を生き生きと伝え、社会構造を復元していく上でも、非常に貴重な遺跡です。言い換えるなら、当時をそのまま包み込んでいるタイムカプセルなのです。

(佐々木)

下長遺跡水田跡模式図



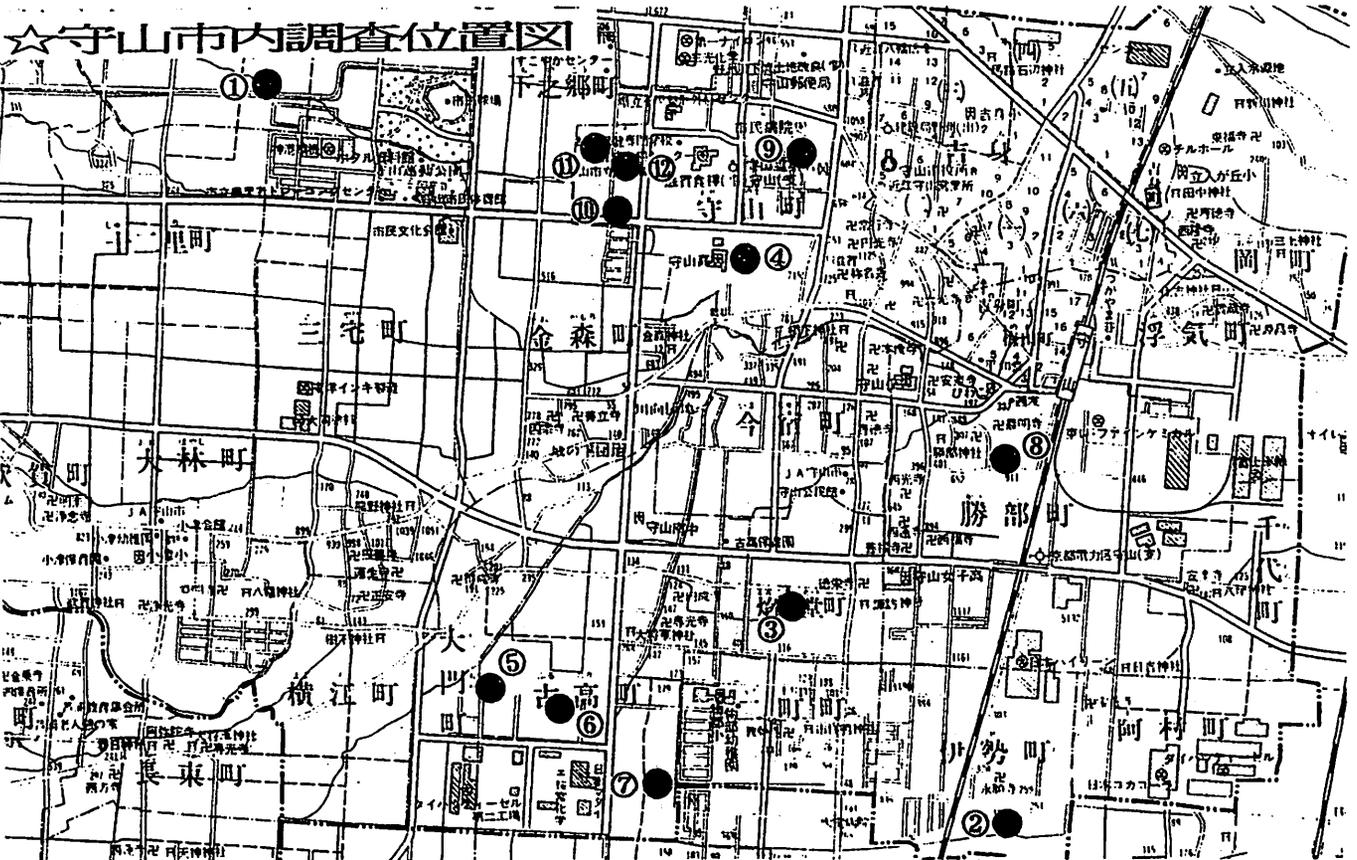
§ 発掘調査だより §

No.	遺跡名(調査回数)	調査地	調査期間	調査面積	担当者
①	石田三宅遺跡	守山市石田町字下藤本・向藤本	H9 7/1~9/	約1300㎡	小島
②	伊勢遺跡(第43次調査)	守山市伊勢町	H9 8/4~8/26	約350㎡	川畑
③	焰魔堂城遺跡(第2次調査)	守山市焰魔堂町字城ノ窟	H9 6/9~7/15	約560㎡	川畑
④	金森東遺跡(第12次調査)	守山市守山町字小勘町・字太田・字大樽	H8 10/22~ (継続調査)	約8000㎡	小出
⑤	下長遺跡(第17次調査)	守山市古高町字浮	H8 10/17~ (継続調査)	約8000㎡	岩崎
⑥	下長遺跡(第18次調査)	守山市古高町	H9 5/3~9/8	約1000㎡	伴野
⑦	塚之越遺跡(第13次調査)	守山市古高町字水柳	H9 4/23~ (継続調査)	約6500㎡	畑本
⑧	吉身北遺跡	守山市勝部町字松原	H9 6/26~8/20	約100㎡	大岡
⑨	吉身西遺跡(第83次調査)	守山市守山町字南高田	H9 6/16~6/27	約330㎡	佐々木
⑩	吉身西遺跡(第84次調査)	守山市守山町字仁王町	H9 7/7~7/19	約130㎡	中村
⑪	吉身西遺跡(第85次調査)	守山市守山町字七ツ坂	H9 7/22~ (継続調査)	約2500㎡	藤原
⑫	吉身西遺跡(第86次調査)	守山市守山町字仁王町	H9 8/6~8/21	約520㎡	中村

※お詫びと訂正 前号の「乙貞」で金森東遺跡(第12次調査)の調査地が異なっていました。正しくは金森町ではなく守山町です。申し訳ございませんでした。

※一覧表のNo.⑤・⑥下長遺跡に関する調査だよりは、2~3ページをご覧ください。

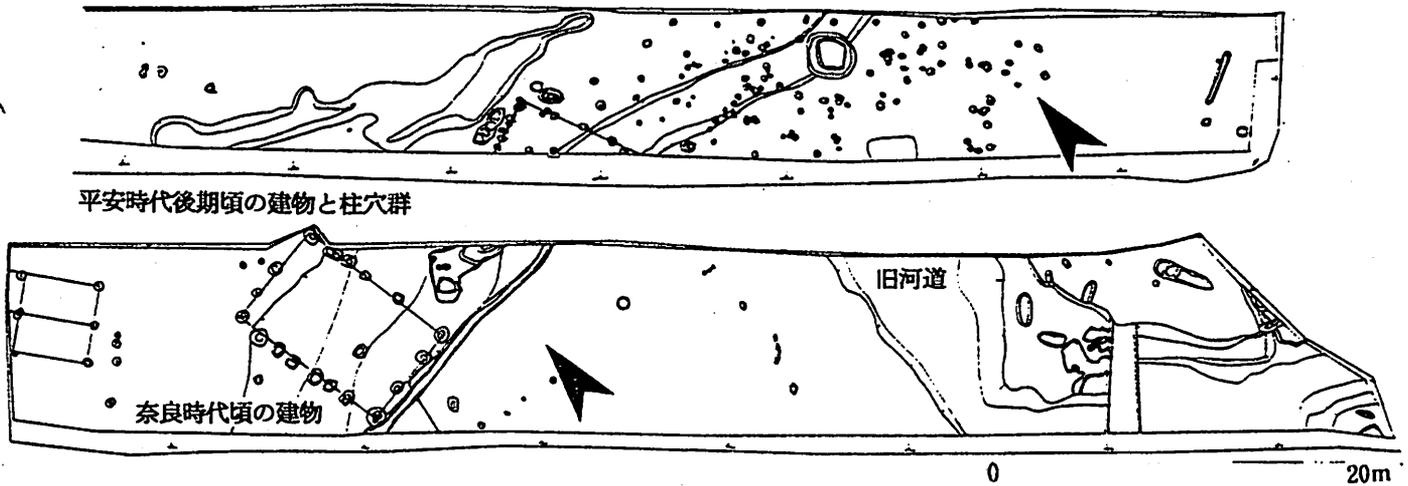
※器状木製品が出土した遺跡は表中No.⑤下長遺跡第17次調査です。



①石田三宅遺跡

7月から石田町字下橋本・向橋本で、道路改良工事に先立ち1,300㎡を対象に発掘調査を実施しました。その結果、古墳時代の旧河道と奈良時代、平安時代後期頃の掘立柱建物などを検出しました。奈良時代頃と考えられる建物の規模は7間×3間で、南側に幅80cm程の溝が近接して掘られています。おそらく、周辺には数棟の建物が存在しているものと考えられます。平安時代後期の遺構は東西60m程の範囲で検出されました。南側約200mの地点からは過去に溝で囲まれた有力農民層のものと考えられるほぼ同時期の集落が見つかっていて、その関係が考えられます。この他、旧河道からは縄文時代晩期の深鉢の破片も少量ながら出土しています。

(小島)

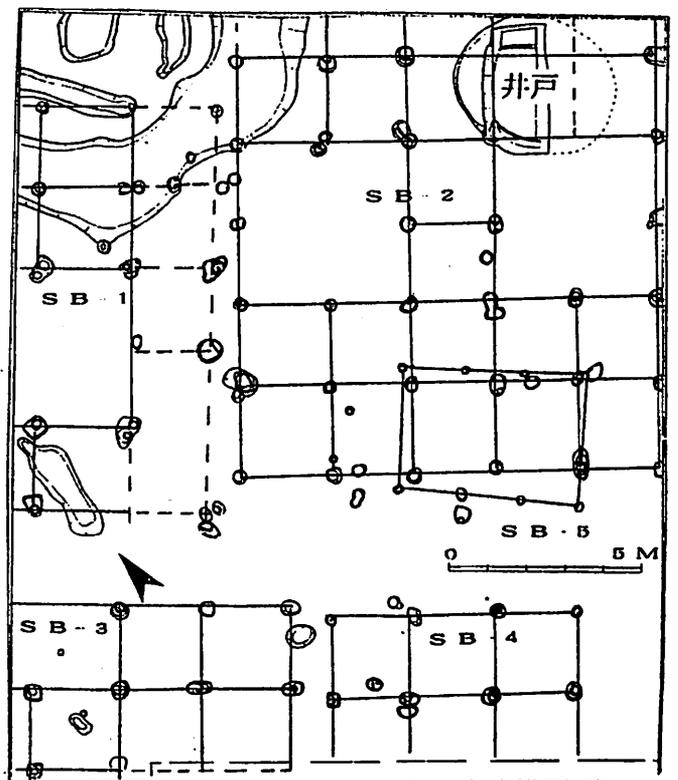


石田三宅遺跡遺構平面図

②伊勢遺跡 (43次)

伊勢町の土地区画整理事業を行っている場所の一角に個人住宅が建設されることとなったため、その敷地を発掘調査しました。その結果、束柱をもつ大型の掘立柱建物が4棟と小型の掘立柱建物1棟、井戸などが見つかりました。大型の掘立柱建物は柱穴から土師器の小皿などが出土し、その状況から12世紀頃の建物と推定されます。その内SB-1は、以前に行われた道路部分の調査でも見つかっていて、それと考え合わせると7~8間×5間(約84㎡)の建物になると思われます。またSB-2も、5間以上×5間以上の大きな建物と推定されます。これらは、周辺で見ついている同時期の建物の中でも中心的な建物だったと思われます。

(川畑)



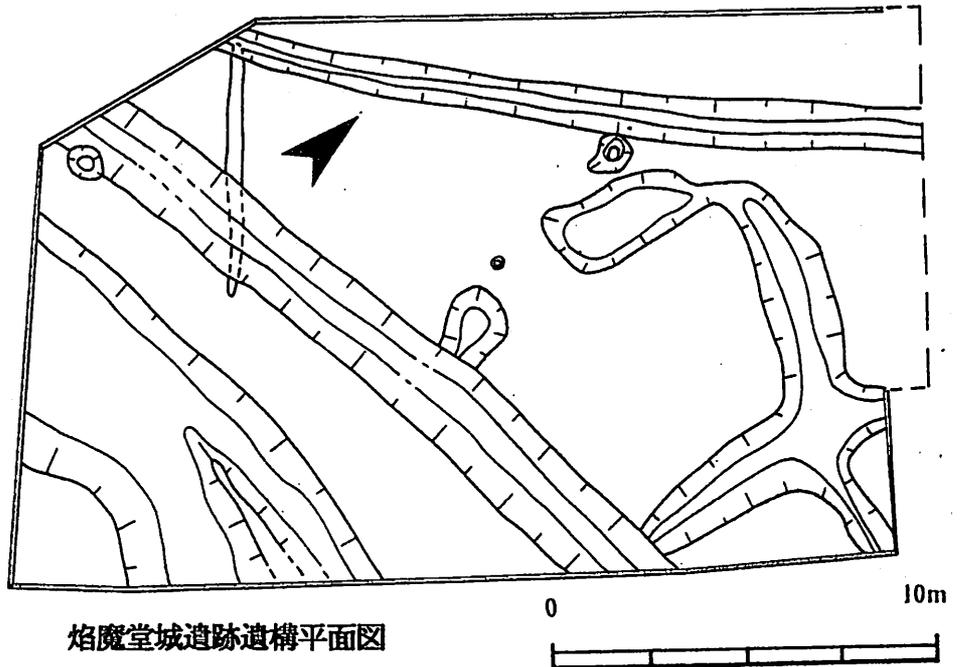
伊勢遺跡遺構平面図

③^{えんまどうじょう}焰魔堂城遺跡（第2次調査）

守山女子高校の西約300m程の場所にあたる水田地1200㎡にマンションが建設されることとなったため事前に発掘調査を行いました。その結果、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の^{しぜんりゅうろ}大溝や自然流路、中世から近世にかけての溝や耕作跡が見つかりました。見つかった方形周溝墓は、古墳時代前期の大溝に削平されていて、^{ぜんよう}全容はうかがえませんが、^{だいじょうぶ}台状部の大きさが、6.5m×8m程のやや長方形になるものと思われます。また、西側の一辺には、中央部分を掘らずに残した^{りっきょう}陸橋状の場所が確認されました。

この方形周溝墓の^{ぞうえいじき}造営時期は、周溝から出土した壺や甕の特徴から弥生時代中期末にさかのぼることが分かりました。前回の「乙貞」には、^{ぜんぼうこうほうがたしゅうこうぼ}前方後方型周溝墓という古墳時代初頭に現れる新しい型式のお墓が紹介されましたが、今回発見されたものはその祖型ともなりえる可能性のあるものです。

今回の調査では、当遺跡で2回目の調査にあたり、墓域の広がりや、^{ぞうぼ}造墓した人達の集落の場所などは^{はんぜん}判然としていませんので、今後の調査に期待されます。（川畑）



焰魔堂城遺跡遺構平面図

④^{かねもりひがし}金森東遺跡

今回は、古墳時代の住居を切る溝から出土した^{せきとう}石刀について報告します。石刀とは、縄文時代後期に出現し、晩期に盛んに作られたものですが、刃の部分は^{とが}尖っておらず鈍いため、実用的なものというよりは、当時の人々の精神生活と深く関わる遺物であると考えられます。今回は古墳時代よりも新しい溝の^{かたぐち}肩口からの出土であり、流れ込みによるものと思われる。県内では伊吹町などからの出土が報告されていますが、守山市内からの出土は今回が初めてです。出土した石刀は下半部を^か欠いているものの、全体にわたって^{ちんせん}沈線および^{あやすぎ}綾杉状の文様が中央を^{もんよう}さかいに^{ほどこ}上下対称に^{もんようたい}施されており、全体で1つの文様体を構成すると考えるならば、下半部には文様を施していない可能性もあります。ところで、石刀は今回のように部分的に出土することが多く、ここに^{じんてきえいさう}何らかの人的影響を考えるとしたらどのようなことが考えられるでしょうか。



石刀

（小出）

つかのこし
⑦塚之越遺跡（第13次調査）

前号でお知らせしたT-1区のと、T-2区の上層・下層の調査を行いました。結果は、それぞれピットを10穴程検出したにとどまりました。現在、T-3区及びT-4区で調査を進めています。

T-2区に隣接したT-3区では、やはり^{きはく}希薄な遺構でしたが、真ん中より北側では、昨年度までの調査で見ついています旧河道の続きを検出しました。この旧河道内は、水田跡として利用されていたと考えられていますが、今のところ確認はしていません。少し西側に離れたT-4区では、南北方向に2条重なった溝や小溝、方形周溝墓1基、ピットを検出し、これから徐々に掘削していく予定です。

(畑本)

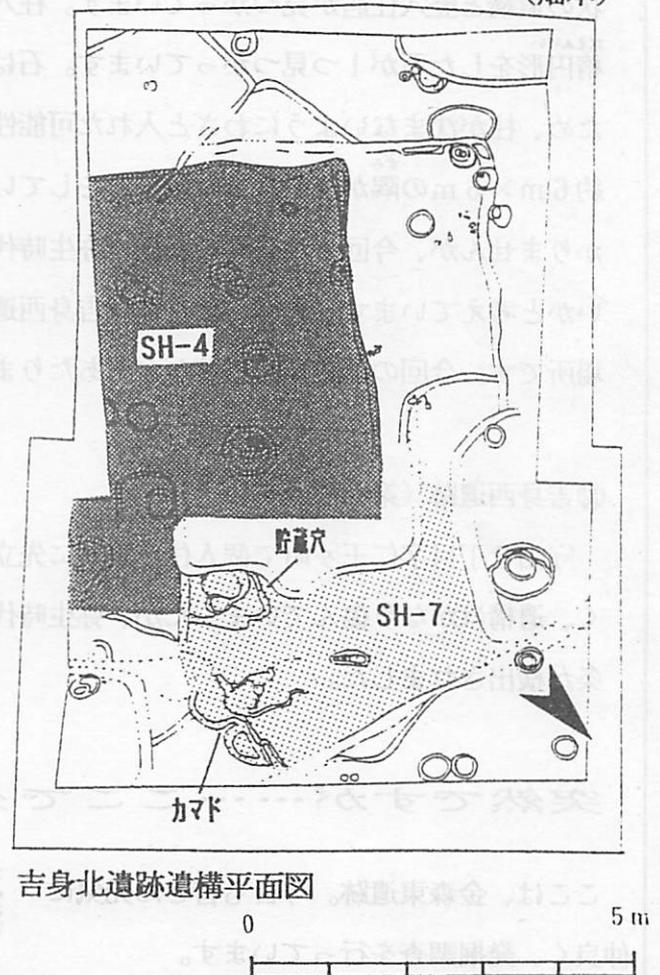
⑧吉身北遺跡

^{てんぽけんじゅうたく}店舗兼住宅の新築にともない、6月末から8月半ばにかけて調査を行いました。今までに行われてきた周辺の調査から、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落と古墳の存在が確認されていました。今回の調査は70㎡ほどの狭い調査区でしたが、古墳時代後期を中心とする^{ひんぼん}竪穴住居が10棟、重なりあって検出されました。同じ場所に何度も、^{ひんぼん}頻りに建て替えて住んでいたようです。

また、10棟のうちSH-4からは^{ちようけつ}カマドと^{ちようけつ}貯蔵穴が見つかり、SH-7の床面からは^{かっせきせい}滑石製の^{うすだま}白玉や^{ゆうこう}有孔^{えんぱん}円板、原石、多量のチップが出土しています。

今後この調査成果をふまえて、当時の人々の生活状況や生産活動を復元していきたいと思ひます。

(大岡)



吉身北遺跡遺構平面図

⑨吉身西遺跡（第83次調査）

昨年度以前に行われた調査から、吉身西遺跡は縄文時代後期に集落が営まれ、弥生時代中期には方形周溝墓が造墓されるなど、各時代にわたる複合遺跡です。今回の調査では、中世から近世にかけての溝が5条、古墳時代の溝が1条見つかりました。なかでも特筆できるのは、縄文時代の土器や炭化物が基盤になる層から発見されたことです。10年ほど前にすぐ近くで行われた第28次調査では、縄文時代後期の竪穴住居や石器製作跡が見つかりました。今後この成果と合わせて、周辺の地理的条件を考慮に入れながら縄文時代の吉身西遺跡の^{じったい}実体を解明していこうと思ひます。

(佐々木)

⑩吉身西遺跡（第84次調査）

店舗建築に先立ち、守山町字仁王ヶ町において約130㎡を対象に調査を実施しました。調査の結果、弥生時代後期と考えられる溝1条と、平安時代の溝4条が見つかりました。この調査地より南東で弥生時代後期の竪穴住居が、また北西で方形周溝墓が見つかっており、この地点は集落と墓域との境目にあたるものと考えられます。（中村）

⑪吉身西遺跡（第85次調査）

現在、調査地の北と南に調査区を設けて約1000㎡を調査しています。南側の調査地からは、柱穴と溝状の遺構と竪穴住居が見つかりました。柱穴からは小さな土器片が少量と、^{くぼみし}凹石とみられる15cm程の^{だえんけい}楕円形をした石が1つ見つかりました。石は柱穴の中にすっぽりとおさまった状態で見つかり、柱が沈まないようにわざと入れた可能性もあります。竪穴住居は現在1棟が見つかり、約6m×6mの^{すろ}隅が丸くなった四角形をしています。調査はこれからなので、時期など詳しいことは分かりませんが、今回の調査地の南側で弥生時代後期の竪穴住居が多く見つかり、その続きではないかと考えています。今回の調査地は吉身西遺跡の西の端にあたり、^{じょじょ}地形的にも徐々に低くなっていく場所です。今回の調査で、集落がどのあたりまで広がっていくのかを知ることができると思います。

（藤原）

⑫吉身西遺跡（第86次調査）

守山5丁目字仁王ヶ町で個人住宅建築に先立ち、約526㎡を対象に調査を実施しました。攪乱が激しく、遺構はかなり傷んでいましたが、弥生時代後期の溝1条、古墳時代後期の溝1条、時期不明の溝5条が検出されました。（中村）

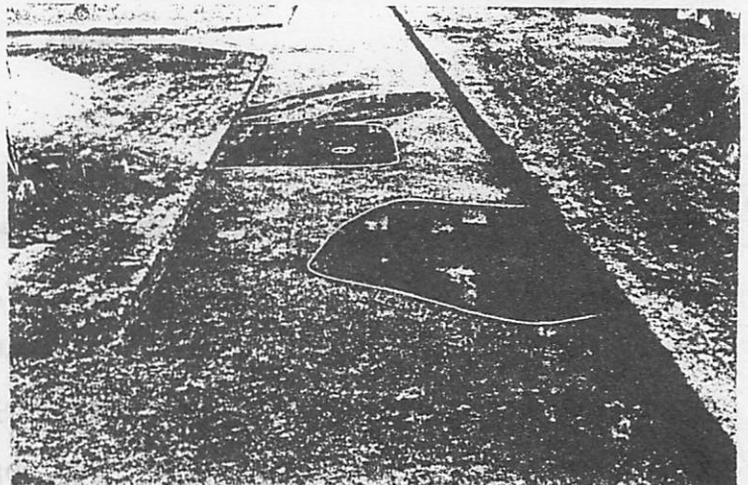
突然ですが……ここでクイズです！

ここは、金森東遺跡。今日も皆さん元気に仲良く、発掘調査を行っています。

^{とこつち}床土を剥いだ後の^はデコボコした地面を、平らになるよう、削っていくと……あれ？何やら土の色の違う部分が出てきました。

それでは問題！

これから掘り進めるにあたって、この写真のなかではどの部分を掘るでしょうか？



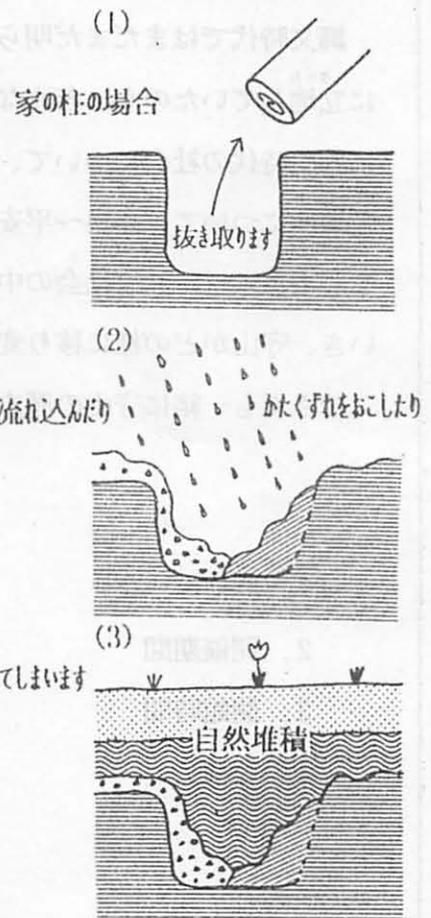
答えは次のページ。

☆掘れる土、掘れない土……遺構はどうやってみつけるの？

発掘現場で調査を行っているとき、現場を見学に来られた方から、「どうしてそこに遺構があることがわかるの？」「どうして掘れる所と掘れない所とがあるの？」といった質問を受けます。今回はこのことについてお話したいと思います。

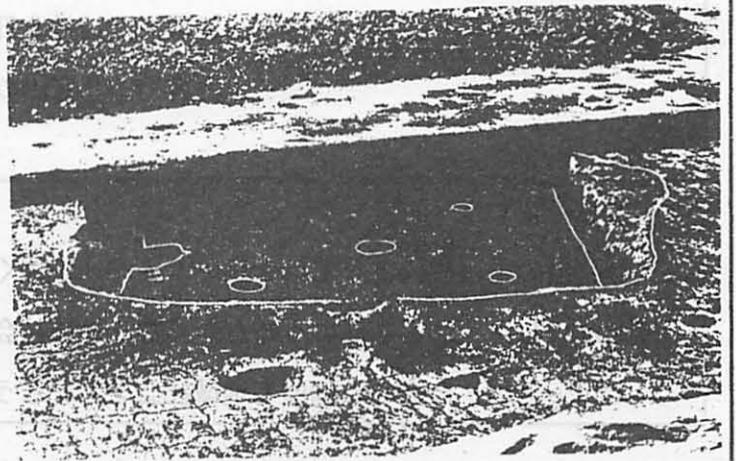
今、私たちが生活を営んでいる地面は、地球が生まれたときの地表面の上に、火山の噴火で降った火山灰や、洪水で流されてきた土砂など、人為が介在しない、自然の堆積が何層にも積み重なった“土の層”（発掘調査をしている私たちの間では「地山」と言います）で出来ています。言い換えるならば、地面は“自然堆積”の広がりであり、私たちはこの地面に家や橋、道を造ったり、野洲川に見られるような河川の改修などの手を加えて活用しているわけです。

同様に、昔の人々も井戸やゴミ穴を掘ったり、家を建てたりしていました。このように昔の人々が、自然を改変して、地面を掘り込んで活用したものを「遺構」と言います。遺構はやがて使われることがなくなり、今ではその姿を見ることは土の中でしか出来ません。それは人々の生活が途絶えたあと（1）、風雨にさらされ、土砂が流れ込み、徐々に浅くなり、またはかたぐずれを起こし、埋まっていくからです（2）。井戸のように深くて、放置しておく危険であるため、故意に埋めてしまうものもあります。そしてその埋まってしまった遺構の上にも新たな自然の堆積が起るのです（3）。遺構が埋まった土は、それが掘られた地面の土と、色や土の質が違ったりします。それは上述の通り、自然の摂理に基づいて堆積した地面と違った土が入り込んだからです。そして私たちはこの「違い」を手掛かりにして、新しく埋まった順番に上から一層ずつ掘り進め、掘れる土と掘れない土、言い換えるなら遺構と遺構でない地面を区別していきます。



クイズの答え！

9ページの写真の黒い部分を掘りました。すると中から家の跡がでてきました。つまり、黒い部分が掘れる部分、「遺構」であって、昔の人々が地面を掘り込んだ痕跡なのです。 (大岡)



☆特別展の開催☆

埋蔵文化財センターにおいて、下記のとおり秋季特別展を開催するはこびとなりました。守山市ではここ数年の開発の増加に伴って発掘調査の件数も増加し、また新聞紙上をにぎやかす遺跡が多くあります。例年の展示会では、新聞紙上にあがった遺跡を中心にその時代についての展示をおこなってまいりましたが、今回は多くの発掘調査の成果から時代ごとに地域社会を見つめなおし、考えていきたいと思っています。今回の特別展は平成2年度に行われた市政20周年の「守山の歴史を掘る」に続くもので、それ以降に行われた発掘調査の成果を公開していきます。

展示は時代別に縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代・中世の5つにわけ、それぞれの時代を見ていきます。

縄文時代ではまだまだ明らかになっていないところが多いのですが、縄文時代の遺跡がどのような所に立地していたのか、どんな様相を呈していたのかを、弥生時代は、下之郷遺跡などの環濠集落を中心に弥生時代の社会について、古墳時代では、下長遺跡を中心に地方豪族の存在や、古墳の築造でみえる階層性について、奈良～平安時代では、役所跡から律令国家が地方をどのように支配しようとしたのかを、中世では、武家社会の中で集落の生活がどの様に変ったかなど、時代別に様々な角度から考えていき、守山がどの様に移り変わっていったのか、発展していったのかを考えていきたいと思ひます。

皆さんも一緒に守山の歴史を考えてみて下さい。多数の御来館をお待ちしています。

記

- | | |
|----------|---|
| 1. 開催テーマ | 「守山の歴史を掘る2」 |
| 2. 開催期間 | 平成9年11月1日(土)～11月24日(月) (開催中無休) |
| 3. 開館時間 | 9:00～16:00 |
| 4. 講演会 | 日時: 11月15日(土) 午後1:30～
演題: 「古墳出現期の畿内と近江」
講師: 石野博信氏(徳島文理大学教授) |
| 5. スライド会 | 日時: 11月9日(日) 午後1:30～
内容: 「守山の歴史を掘る2」 |

※講演会・スライド会は2階会議室にて行います

(編集後記)

今、世の中は殺伐としていて良いニュースを聞くことはあまりありません。時代が変わったからというだけでしょうか? こういう時だからこそ地域社会を見つめなおしていかなければいけないときではないでしょうか? 今回の特別展も地域社会を考えるうえで少しでも役に立てば! と思っております。